

思い出1 2014-07-10 00:05:10

三枚橋病院は群馬県太田市にある精神科の病院だ。創立者は石川信義医師（以下、「三枚橋病院の思い出」記事では「院長先生」と呼ぶ。それが私にとって彼に対する自然な、そして唯一の呼称だからである）。



三枚橋病院はわが国で初の「全開放病棟」の精神病院である。つまり、鍵付き・鉄格子付きの閉鎖病棟を持たない、すべてが開放病棟の画期的な精神病院である。記録を見ると、昭和43年5月に開院だという。

三枚橋病院の全容については、院長先生の書いた『開かれている病棟—三枚橋病院でのこころみ』（星和書店、1979年）、『心病める人たち—開かれた精神医療へ』（岩波新書、1990年）という書籍が出版されているので、正確なところはそちらをお読み頂きたい。読んで頂ければ分かるが、すごい（素晴らしいという意味の）病院である。しかし私は、この病院のすごさを語るつもりはない。語るのは、もっと個人的な経験だ。

昭和42年生まれの私は、この三枚橋病院のほとんど開院当初から数年間、病院に関わった。というより、私は、物心ついたときに三枚橋病院にいた。

「それはいったいどういうこと？」という疑念はごもっとも。それをこれから語って行くつもりである。

院長先生は今年84歳らしい（ご存命である）。三枚橋病院は、かなり前に引退なされてるらしい。

そして聞くとところによると、三枚橋病院の病院としての性格も、院長先生の引退の以後、ずいぶん変わったとのこと。そもそも斯界で有名な病院、著名な医師であるだけに、以前からとても事実とは思われない誹謗中傷もあった。

院長先生もお歳であるし、三枚橋病院の開院当時を知っている人々も高齢化して来ている。または、すでに鬼籍におられる。この後の記事にしばしば出て来る当時の若手看護婦であった私のおふくろも、もう73歳だ。

三枚橋病院の開院当時を知る最も若い証言者は、間違いなく私だ。このことを語っておくことは、私の責務であるとさえ思われる。

近頃、というかこの記事を書いた当日、精神病患者に対する偏見に満ちた記事を読んだ。しかもそれを書いたのは、(精神科でないにせよ) 医師だ。

こういった事情も、私にこの記事を書くことを迫る一つの要因となっている。

もちろん、この記事を書く主要な目的には、精神病の患者に対する誤解・偏見を除きたいという意図がある。

ということで、三枚橋病院の思い出を綴って行きたい。なるべく事実をベースに、私自身の感想は最小限に。

現在、最も多用している Facebook の記事で書いて行こうかと思ったが、こういうシリーズもの、後年に残したいものは、やっぱりブログかな。ということで、ブログと Facebook の併用で記して行きたいと思う。

思い出 2・2014-07-10 15:17:14

私は太田市にある鳥山保育園に通っていた。そして保育園が終わると、おふくろか、あるいは小川さんが迎えに来て、同じ保育園の兄貴と一緒に三枚橋病院に帰るのが日常だった。私の記憶は、この時期から始まる。たぶん、3歳くらい、昭和45年頃のことだと思う。

おふくろは三枚橋病院に看護婦として働いていた。おふくろが日勤のときは仕事が終わるまで、病院で患者さんや看護婦さんや事務所の人たちに遊んでもらっていた。その当時、もちろん託児所があるわけではなく、私は病室やらナースセンターやらをウロチョロしていた。おふくろが夜勤のときは、そのまま病院に泊まった。看護婦の当直所で兄貴と寝ていた。

そういう生活が当たり前だったので、というより、物心ついたらそういう生活の中にいたので、当時はなんの疑問もなく、特別なこととも思わなかった。この生活が実はかなり特殊なものであったことに気付いたのは、高校生くらいになってからだったように思う。

よく保育園に迎えに来てくれた小川さんというのは、病院の運転手兼設備関係の仕事をしている60歳前後の男性だった。物静かで、優しく、それでいて頼りがいのある人物だったので、患者さんにも職員にもみなに好かれていた。私も本当の祖父のように慕っていて、わがままばかり言っていた。

私は昭和42年、富岡市に生まれたのだが、昭和44年頃には太田市の長手という地域に住んでいた。おふくろ、兄貴と私の母子家庭であった。このあたりの事情は本論に関係ないので省略。ともかく、そうだったのである。

おふくろは看護婦の資格を持っており、中学卒業以来、結婚するまで看護婦として働いていた。母子家庭となったとき、おふくろは再び看護婦として働こうと、いちばん近くにあった開院間もない三枚橋病院の求人に応募した。

面接の際、院長先生とおふくろとの間に、次のようなやりとりがあったとのことである。

「子どもが小さいので、保育園が終わる時間には帰らせて頂かなくてはなりません。夜勤も無理です」

「え、なんで？どうして？」

「ですから…！子どもが小さいので…」

「じゃあ子ども連れて来ればいいじゃん」

「は…？」

「夜勤のときは子どもも泊まればいいじゃん」

「……？」

「そうすればいいよ！」

この時、おふくろは知る由もなかったが、院長先生は思考も行動も常人ではないのである。

託児所もないのに、職場に子どもを連れてくればいいのか。夜勤も子連れですればいいのか。まして、ここは精神病院だ。本当に構わないのか、という疑問は抱きつつ、おふくろはありがたくその申出を受け、就職することにした。実際、母子家庭にはありがたいことだった。残業・夜勤ができるとできないとでは、収入が大きく異なる。



このようにして、私は三枚橋病院で多くの時間を過ごすことになった。

思い出3 2014-07-12 13:01:14

先の記事で、私は「患者さんや看護婦さんや事務所の人たちに遊んでもらっていた」と書いた。

これらのうち、主な遊び相手は患者さんであった。これは当然のことであって、おふくろを含む職員は忙しく、子どもと遊んでばかりもいられないのである。そうすると遊び相手の中心は、自然に、(比較的)ヒマな病棟の患者さんという成り行きになった。

私は病室にノコノコ出かけて行って、遊んでもらい、時にはそのまま病室でお昼寝させてもらったりしていた。不思議と、遊んでもらったのは男性の患者さんばかりで、女性の患者さんとは遊んでもらった記憶があまりない。たぶん、私自身が、女性の優しい可愛がり方を嫌い、肩車をしてもらったり、プロレスをしたり、仮面ライダーごっこをしたりするのを好んでいたからだと思う。

そして私のような幼児が病棟に自由に出入りできたのも、今思えば、鍵のない「全開放病棟」なればこそであった。

この話をすると、しばしば聞かれる。あるいは、いま、読者にもそう思っている人はいるのかも知れない。「子どもが精神病患者と関わって問題ないのか?」と。もっとはっきり言えば、「危なくないのか?」ということである。

結論的に言えば、そして私の実感としても、何の問題もなかった。

もちろん、患者さんの中には好きな人もいたし、嫌いな人もいた。優しい人もいれば、怖い人もいた。しかし、そんなことは、何も患者さんに限ったことではないであろう。患者さんでなくても、好きな人、嫌いな人、優しい人、怖い人が大人にはいた。そしてそれは、何も私に限ったことでもないであろう。全国の、いや全世界の子どもに共通のことのはずである。

ちなみに、私が三枚橋病院でいちばん嫌いだったのは、若い男性事務職員の「よしのぶちゃん」だった(笑)。よしのぶちゃんは妙に威勢が良くて、大声で子どもを囃し立てるので、恐かった。患者さんより、ずっと恐かった。

病院の特質上、子ども心にもやはり「普通ではない」と思える患者さんもいた。

自己の殻に閉じこもってしまっている人がいた。膝を抱えて座り込んで、長い時間、ひとつの所をずっと凝視しているのである。私は気になって尋ねた。

「ねえ何してるの?」

「・・・」

「ねえ何してるの?」

「・・・」

「ねえ何してるの?」

「・・・」

私の方で飽きて、問題は起こりようがなかった。

いつも錯乱して、奇声を上げながら走り回っている若い女性患者の M がいた。鳥居みゆきという

芸人がいるが、あんな感じた。いつも白いだぼっとした服装をしていて、その点も似ている。ただ、Mはもっと切羽詰まった表情と声をしていた。

もちろん、私はMとは遊ばなかった。遊び相手とは思えなかったし、何というか、子どもである私の「管轄外」という気がしていた。つまり、私には無関係の大人の一人という印象だった。Mの方も、子どもには何ら興味がないようで、私の前はいつも素通りして行った。

私が嫌いなタイプの患者さんが私をかまって、私が泣いてしまうこともあった。しかしその時、すぐに「おい、やめろ！」と助けてくれるのも、また患者さんなのであった。

患者さんは非常に個性的だったが、それはまさに「個性」というのに過ぎないのであって、ことさらに危険視すべき人たちではなかった。少なくとも私は、三枚橋病院で（職員のよしのぶちゃん以外に）怖い思いをしたことはなかった。不幸にして、彼らは精神を病んでいた。しかしその一事をもって、どうして危険視されなければならないのか。彼らがいったい何をしたというので、危険視されなければならないのだろうか。

当時の私は、もちろん精神病という概念が分からなかった。逆に言えば、本当の意味で何の偏見もなく、彼ら患者さんと接していた。そして、私の患者さんに対する印象は、患者さん以外の普通の大人と、ほとんど何も変わるところがなかったのである。それはすでに述べたとおりであるが、患者さんの中には好きな人も嫌いな人もいるし、優しい人も怖い人もいるという、ごく当たり前の印象なのであった。

思い出4 2015-09-10 19:15:40

もはや、言い訳がきかないほど長いブランクを経てしまったが・・・これを書き終えないことには、第1話で言った責務を果たせない気がするので、やっぱり書くしかないんでしょうねえ・・・



三枚橋病院はにぎやかな病院だった。いま思い出しても、大変な活気があった。それは、ただ職員がにぎやかだったということにとどまらず、患者さんも非常に元気だった。子どもの私には、職員なのか患者さんなのか、判断がつかない人もたくさんいた。

にぎやかさの要因の一つは、病院行事の多さにあった。何だか、年がら年中、お祭り騒ぎをしていた。年中行事の文化祭や盆踊りなどには、病院外の地域住民なども参加していて盛況だった。患者さんの出す模擬店で、かき氷や焼きまんじゅうを食べた。舞台では職員と患者さんが入り混じって、演劇や歌舞伎のまねごとなどやっていた。おふくろが「シンデレラ」の意地悪な姉の役を演じて、はまり役だったのをよく覚えている(笑)。

院長先生はまさに水を得た魚のようにしゃぎ回って

いた。歌舞伎の白浪五人男で「知らざあ言って聞かせやしょう」とか言っていた。

いま思えば重要なことは（当時は当たり前だったが）、その白波五人衆は、医師と病院職員と患者さんの混成チームであったこと。病院と患者さんとの間に境界がなかったのだと思う。なにしろ、私は学齢前の子供だったので偉そうなことは言えないが、病院職員と患者さんとの間に隔たりは感じなかった。私にとっては、両方ともただの「大人」だった。そんなことは当たり前なのだが、それが当たり前でないことを知るのは、私が（今の仕事に就いて）他の精神病院の姿を知ってからのことである。

夜は、後に週刊誌等で有名になった「精神病棟でのダンスパーティー」なのであったが、実は私のはあんまりその辺の実情を知らない。だって、ダンスパーティーの時間は、保育園児の私は「おネム」の時間だったのである。ただ、妙にノリノリの院長先生の屁っぴり腰のゴーゴードダンスを笑ったことは覚えている。

————*★*————*★*————*

最初の3枚の写真は、岡住貞宏さんがアルバムから探してくださったもの。
以下は、写真につけていただいた説明です

1枚目は、たぶん、昭和44年～45年頃だと思います（私が2歳～3歳くらい）。三枚橋病院の開院が昭和43年だそうですから、開院後1年～2年くらいでしょうか？背景に見える細長い建物は、当時の病棟です。

2枚目は、その1～2年後くらいだと思います。しゃがんでいるのが私で、隣は兄です。背景にみえるテント屋根は、病棟から「喫茶室モニカ」に続く渡り廊下の天蓋です。天蓋下の階段は、1枚目の写真にも写っています。

3枚目は、さらに1～2年後だと思います。

「新館」を建築中の現場に降りる階段です。当時は「新館」と呼んでいましたが、今は何と呼んでいるのか・・・

ディスコの風景は、藤原瑠美さんの『自由こそ治療だ 石川信義さんの精神病院逆転の発想』（『CARE design』1998. No.4）から。

